

徒然草

殺さずに食べる文化：ブータンの食生活に思う

藤村建夫

ミャンマー日本エコツーリズム会長

一度は訪ねてみたい国の一つが、国民の97%が幸福と感じている「国民総幸福」の国、ブータンであった。その願いが幸運にも実現したのは、UNDP 主催のワークショップに参加するために、ブータンを訪れた一昨年のことである。私の目的は、UNDP のプロジェクトである「南南協力世界資産・技術交易プロジェクト」をブータンの政府と民間団体に紹介することであった。このプロジェクトは開発途上国の中小企業同士の技術移転や直接投資のパートナーを斡旋しようとするものである。

ブータンは、ヒマラヤ山脈の東側に位置し、人口70万人の山岳国家である。人々は熱心なチベット仏教ドゥク・カギユ派の仏教徒で、仏教の教えにしたがって日々を暮らしている。そのため、あらゆる虫や動物を殺さない。バンコックから首都のティンプーに行くためには、約3時間のフライトだ。パロ空港に近づくと飛行機が急に機体を右に傾けてグーンと右折しながら進んで行く。そして飛行場が見えて来ると機体を次第に正常に戻して着陸する。なんともスリルのある飛行である。

ワークショップには、およそ30人の官庁職員と商工会議所等の民間団体職員が参加した。ブータンでは、毎年4000人の学校・大学生が卒業するが、公共部門はその半分しか雇用できないので、残り半分は民間の農業、工業、サービス部門で雇用しなければならない。特に失業者全体に占める15歳～29歳の年齢層の割合は65%という。このため中小企業の振興が非常に重要だということであった。

ホテルは贅沢ではないが、部屋が広く暖房が入りお湯も十分出るので快適であった。一つだけやや不満であったのは、料理の肉がいずれもやや硬いというものであった。「どうしてお肉が固いのか？」と尋ねたところ、「干し肉を戻しているからだ」という。どこの家の庭先にも肉が干してあるようだ。お店に行くとどこでも干肉と魚の干物を売っている。聞けば、全てインドから輸入されているとのことだ。

ワークショップではいかにして新規の中小企業を興していくかが重要な課題であるとして、その振興策が議論された。外国からの直接投資を招致することも優先策であり、タイやシンガポール、日本などからの投資を歓迎したいとしている。

私は、ホテルの真下の谷間にきれいな川が流れているのを見て、マスの養殖は可能性が

あるのではないかと考えた。あるいは、アメリカのようなスポーツ・フィッシングでマス釣りは、川に戻すというのも可能ではないかと。

そこで、このことをワークショップの参加者に聞いてみた。「ブータンは山国でどこにでもきれいな澄んだ水が流れており、マスの養殖には絶好の場所のように見える。この水を利用してマスの養殖を産業として育成してはどうか？成魚になれば輸出もできるのではないだろうか？あるいは、釣れたマスを川に戻すというスポーツ・フィッシングも面白いかもしれない。どうであろうか？」と。

何と参加者の多くは、このアイデアに否定的であった。「ブータンでは動物は殺さないことになっている。何年か前も同じようなアイデアが出されたが、却下されているので、今回、それを出しても無理だろう」というものだった。私は「皆さんは食事に鶏肉、牛肉、豚肉、魚を毎日食べているではないか。どうして食べているのに、食用の動物を殺してはけないのだ？殺さないで食べることはできないよ！」と聞いてみた。すると「食用の肉と魚はインドから全て干し肉、魚の干物として輸入されている。殺すのはインド人で食べるのはブータン人さ」という。肉類以外にも殆どの工業製品がインドから輸入されている。それでは外貨がたくさん必要だ。その外貨は電力を売って確保しているのだが、貿易収支はいつも赤字だという。

新しい産業を興すには電力と地元資源の開発が不可欠だ。特に山国の産業は軽薄短小で付加価値の高い製品が望ましい。電力はあるから軽薄短小の光学精密機器、IT 製品など輸送費があまりかからない軽量小型製品に特化した地場産業を育成すべきであろう。そして観光産業だ。

外国人観光客は消費する。消費の中でも日々の食事は不可欠だから、出来るだけ地元の食べ物を提供することが望ましい。中でもタンパク質は不可欠だ。動物性たんぱく質の中でも柔らかい魚は、おもてなしの必需品だ。その意味でもマス養殖のポテンシャルは極めて高い気がするのだが。これが不可能だとすると、殺さないで食べられるタンパク質は大豆で作る日本企業の「まるっきりお肉」¹の導入しかないのだろうか？

¹ <http://www.maisen.co.jp/shopping/oniku/oniku.html> 参照